

カニバルワールド 後編

新種のウイルスにより、人肉以外が汚染された世界。
美女達は性交奴隷兼食肉として飼育される。



作者 大黒達也

カニバルワールド 後編

作者 大黒達也

『あらすじ』

西暦二千三十年七月、アメリカ国防総省の研究所で開発された新種のウイルスが、テロリストの犯行により、ばら撒かれる。新種のウイルスとは、人間の細胞をベースに造られたもので、敵国の農作物に被害を与えるために開発されたが、突然変異により人間を除く、すべての生命体に感染するようになる。人間が、ウイルスに感染した生物を摂取した場合、ウイルスが出す特殊な酵素により脳細胞が破壊される。

唯一、口にして安全なのは、人肉のみ……。

『登場人物』

木村 きむら
真一 しんいち

日本初代の大統領。日本の危機を救うために、策謀の限りを尽くす。

三神 みかみ
マリア

二十代半ばにして、木村の秘書官兼ボディガードを勤める。木村を心から愛し、崇拜する。若くはちきれんばかりの肢体を持ち、人目を惹く美貌の中に、悪魔的な心を宿している。

熊谷 くまがや
麗子 れいこ

食肉研究所の所長。知的な美貌と高い知能の持ち主。研究用に捕らえた女達に残虐の限りを加える、究極のサディスト。

加納かのう
沙織さおり

防衛研究所に所属する上級士官。 捕らえた中国女性

兵士に性的虐待を加える。

イクソン

韓国駐日大使の一人息子。 両親の知り合いである木村の養子として育てられる。

『目次』

第四章 北京陥落

第五章 終戦

エピソード

『本編』

第四章 北京市陥落

北京市郊外の平坦地に百万人の中国人民軍と、四万足らずの陸上自衛隊が対峙していた。近代的な陸戦では、航空部隊の支援を得て行うのが通常のやり方であったが、両軍の航空戦力は、日本海上で戦闘最中であった。

陸上自衛隊の装備は、中国人民軍より遥かに進んでいたが、肉弾戦の場合、兵器の質の良さが勝敗を決める訳では無かった。中国人民軍は数にものを言わせて、陸上自衛隊を抹殺するつもりでいた。両軍の野戦砲から多数の砲弾が発射された。陸上自衛隊員の大半は、深い塹壕の下で息を潜めていた。

中国軍の対地ミサイルに対して、最新式ペトリオット

I P A C 5 が使用され、ほぼ100%迎撃に成功していた。

陸上自衛隊が有する最新鋭の三十式戦車数百両が、砲弾が炸裂する平坦地に散開していた。三十式戦車は、いかなる装甲を施した戦車も破壊するレールガンの主砲に採用しており、さらに、装甲に特殊合金を使用し、百二十ミリ滑空砲弾を跳ね返すほどの能力を有していた。

レールガンとは、電磁誘導を利用して弾体を発射する兵器で、前世紀から研究が続けられてきたものであり、威力は強力で、重さ十キロの弾体を秒速百キロメートルまで加速することができた。三十式戦車は、装甲が頑強なため、野戦砲弾が直撃しないかぎり、被害を受けることは無かった。

中国人民解放軍の機甲師団が、押し寄せてきた。今世

紀初頭に配備されたT一〇型戦車百両と多目的戦闘車が、砂塵を舞い上げて迫ってきた。背後には、数千人規模の歩兵が散開していた。これを自衛隊の三十式戦車数十両と数百体の戦闘ロボットが迎え撃った。

戦闘ロボットは、二十世紀後半に日本の国産技術によって開発された人型ロボットを原型としていた。小銃弾を跳ね返す特殊なチタン合金によって造られた身体は、身長二・五メートルほどもあり、五・五六ミリ チェーリングンと四十ミリグラネードランチャーで武装していた。

三十式戦車の化学ジェネレータが唸りを上げ、秒速百キロにまで加速された弾体が、T一〇型戦車を次々に粉砕した。戦闘ロボットが、中国軍兵士を、五・五六ミリ チェーリングンの一斉射撃で攻撃した。中国軍兵士が所有

する自動小銃では、戦闘用ロボットの装甲に歯が立たず、次々に撃ち殺されていった。

初戦は、自衛隊の勝利であっけなく終了した。間髪をいれず、今度は、数百両のT-10型戦車が、数万人の歩兵を従え、怒涛のように押し寄せてきた。

「柴隊長。これでは切りがありません！」

伝令が前線基地の地下塹壕に、走り込んできた。前哨部隊の隊長を務める柴一等陸尉が、監視モニターで敵軍の様子を監視していた。

「大西陸曹。ご苦勞であった。桜井三等陸尉。プラズマ砲の準備だ。戦闘中の三十式戦車と戦闘ロボットに退避するように伝えろ」

プラズマ砲の原理は前世紀から、研究されていた。高

出力レーザー・ビームを空气中に放射すると、ビーム中の電子と空気分子が衝突して、イオン化され、広範囲の領域にプラズマの爆風が発生する。これが戦車表面に接触すると、高熱で表面材料を蒸発させるとともに、内部に衝撃波を生み出し、乗員を殺戮する。歩兵は、爆風や高熱により焼き殺される。

三十式戦車と戦闘ロボットが、退避した後に短い筒状の砲を持った多目的装甲車が十台散開した。化学ジェネレータが唸り、迫り来る機甲師団に向かって、高出力レーザー・ビームを照射した。

地鳴りのような轟音と稲光が発生し、中国人民解放軍の戦車部隊の中心部に、いくつもの眩い光玉が発生し、一瞬で弾け散った。

数百両のT一〇型戦車が一斉に火を噴き、数万の将兵の身体が炎に包まれた。二回目の戦闘も陸上自衛隊の圧倒的な勝利で終了した。間髪を入れず、後続の中国機甲師団が動き出した。今度はさらに勢力を増していた。砂塵を巻き上げ、自衛隊陣地に猛進してきた。自衛隊陣地から多数の地対地ミサイルが発射された。

「司令。限界です。これ以上持ちこたえられません！」
最前線の前進部隊から、絶叫にも似た無線が送られてきた。

「援軍が来るまで、何とか持ちこたえるんだ！」
北京市攻撃部隊の総司令官である橋二等陸佐が、マイクを握り締めた。その時、一機のステルス型多目的攻撃機が、陸上自衛隊の司令基地に降り立った。側面のハッ

チが開き、一人の将兵が出てきた。

「加納一佐。お待ちしていました！」

橋二等陸佐が前に出て、出迎えた。

「間に合ったようね」

加納がヘルメットを脱ぎながら言った。長い黒髪が風
にたなびき、軍人には似つかわしくない美貌が現れた。

加納沙織。防衛大学を卒業後、防衛研究所に勤務し、
三つの博士号を有する才女であった。今年二十七歳にな
り、モデルといっても通用する美貌を持っていた。抜群
のスタイルをパイロット服に包んでいた。

「橋二等陸佐。こっちに来てくれない」

加納は橋を機内の操縦室に誘った。

「援軍はどうされたのですか？」

「だから、私が来たじゃない」

「……お言葉ですが、多目的戦闘機一機では、数百万の敵兵を相手にできません」

忌々しげに加納を見詰めた。

「これ、何かわかる？」

加納は胸ポケットから、小さな塊を取り出して、橋に手渡した。それは、体長三センチほどの強化プラスチック製の蜂型ロボットであった。

「キラービーと呼んでいるのよ。こいつにはね。シアン化カリウムを注入する毒針が仕込んであるの」

それを聞いて、橋は、手の平に載せた塊を、払い落としました。

「心配しなくていいのよ。命令しない限り、無害よ。毒

針の他に、即効性の麻酔針も持っているわ。こいつを数百万匹運んできたのよ」

加納の美しい瞳が、輝きを増した。

多目的攻撃機の上部ハッチが開けられ、数百万匹のキラビーが、一斉に上空に舞い上がった。羽音で辺りは騒然となった。首都 北京を防護する数百万の中国陸軍部隊に、巨大な黒雲が襲い掛かった。大勢の兵士が、キラビーに纏わり付かれ、もがき苦しみながら、倒れ伏した。

「楊。私の燃料が切れたら、貴女が代わって撃つよ。

その間に別の火炎放射器をセットするから」

二十歳を過ぎたばかりと思われる中国軍の女性兵士が、
年下の女性兵士に指示をしていた。

「はい！た……隊長。死なないで下さい」

「死ぬときは一緒よ」

楊が部下の麗に抱き付き口付けをした。二人の頭上から、数百万のキラビーが襲い掛かった。楊の火炎放射器から、数千度の炎が放射され、迫り来る大群に浴びせ掛けた。黒焦げになったキラビーの残骸が、雨のように降注いだ。

一瞬後、キラビーの攻撃が、ぴたりと止まった。数万匹のキラビーが、二人の頭上十メートルのところまで、渦をまくようにして滞空していた。その様子を、加納が望遠モニターで観察していた。

「小生意気な小娘達だ」

独り言を呟き、コンソールパネルに新たな指令をインプットした。上空で滞空していたキラビーの群れが、再び二人に襲い掛かった。火炎放射器の炎を避けながら、数万匹が、二人の身体に殺到した。麻酔針は使わなかった。二人の肉体に纏わりついては、衣服を噛み千切った。一瞬で二人は、素っ裸に剥かれた。若く美しい裸身が、数万匹のキラビーに纏わりつかれながら、火炎放射器を放射し続けた。不意に二人の動きが止まった。火炎放射器を地面に落とし、黒髪を掻き毟り、絶叫をあげた。

二人の膺とアヌスから、キラビーが体内に侵入していた。肉体を傷つけるのではなく、単に入り込むだけではあるが、数十匹のキラビーが体内で蠢く感覚は想像

を絶していた。

二人は地面に倒れ伏し、身悶えした。膣内と直腸内は、隙間が無いくらいキラビーで満たされていた。クリトリスや乳房にもキラビーが這いまわり、微妙な振動を与えられた。脳内がスパークし、身体の芯を快感が突き抜けた。二人の年若い美女が、鋭い喘ぎ声をあげながら、逝き続けていた。

「あの二人の小娘達は、私が預かるわ」

「しかし、捕虜の捕獲は第三特殊部隊の担当です」

「私の言うことが聞けないというの？」

加納は、呆然と立ち尽くす橘のズボンのジッパーを下ろした。橘の前に膝立ちとなって、黒々とした男根を手で数回扱いた後で、艶めいた上目使いで、亀頭を舐め回

し飲み込んだ。多目的攻撃機の操縦室は、二人だけであつた。

「……わかりました」

橘は、加納の流れるような黒髪を掴みながら、腰を振つた。広大な原野は、見渡す限り死体に埋め尽くされていた。第三特殊部隊が操縦する多目的戦闘車両が、死体を踏み潰しながら進んでいた。その後ろには戦闘ロボットが従っていた。時折、停止しては、戦闘ロボットが意識を失っている女性兵士を捕獲し、戦闘車に運び入れた。女性兵士の探索には、赤外線センサーを使用していた。生きて体温を有する彼女達を発見するのは容易なことであつた。車内には、キラービーの麻酔針によって意識を失い、素っ裸に剥かれた女性兵士達が、折り重なるよう

に並べられていた。

「凄いぜ。この女は特A級だ。見ろよ。物凄い美人で、最高のボディの持ち主ときている」

戦闘車内で女達の健康状態をチェックしていた田中陸士が、上擦った声を上げた。

「止めろ。女をいたぶるのは規則違反だぞ」

側で、同じ作業をしていた大原陸士が、気だるそうな声を上げた。大原自身も若く美しい女性兵士の背後から尻を抱き、臍を犯していた。田中陸士が、女の股間に入り、太腿を大きく持ち上げ臍を舐め始めた。

その頃、北京市郊外から、中距離核ミサイル数十発が発射された。白煙をあげながら、徐々に速度を上げて行った。

「大統領！今、敵軍が核ミサイルを発射しました」

「迎撃システムはどうなっている？」

「イージス艦十隻からSM三ブロック二Aを発射しました。敵弾道ミサイルに接近中です」

大統領官邸の地下深くに設置された総司令部では、大統領の木村と自衛隊の幕僚長等で構成されたスタッフが、息を詰めて、壁全面に設置された大型スクリーンに魅入っていた。

SM三ブロック二Aとは日米が共同開発を行った迎撃ミサイルで射程二千キロ、高度一千キロの性能を有していた。高層域で、敵ミサイルを迎撃するミサイルシステムで、イージス艦並びに軍事衛星の誘導情報にもとづき、

運動エネルギー迎撃体（KKV）を敵ミサイルに衝突させ撃破するものであった。

「大統領！第一段階で、敵ミサイル百機のうち、八十％の撃墜に成功しました。ただいま、第二段階が進行中です」

「まだ、二十発も残っているのか……」

木村は、額に流れた汗を手の甲で拭いた。二十発といえども侮れなかった。中国軍は弾頭に二から三メガトンの熱核融合弾を使用していた。一発で九州を壊滅させられるだけの威力を持っていた。スクリーン上では、敵ミサイルを示す赤の輝点が、明滅していた。

「国民の退避状況はどうなっている！」

「ほぼ百％、シェルターへの退避が完了しております！」

「大統領！日本海上の米国海軍のイージス艦から、迎撃ミサイルSM三ブロック二Aが発射されました」

「大統領！敵ミサイル二十発のうち、一発を撃ちもらいました。第三段階に突入します」

「ありったけのペトリオットを発射するんだ！」

「大統領！敵ミサイルは、大量のデコイを放出しました！弾頭を特定できません」

「……」

スクリーン上の赤い輝点が明滅しながら、正規の軌道を外れ、宮城沖五十キロの地点に向かっていった。木村やスタッフは呆然とした表情で、輝点を見詰めていた。

午後九時の仙台市街は、市民が地下シェルターに退避

しているので、ゴーストタウンのような静寂に包まれていた。中心街にある国立病院の五階窓から微かな光が漏れていた。

「兄貴！このスケ最高のタマですよね」

「いいから、あっちで見張とれや！」

二人のヤクザ風の男達が、二十歳くらいの女を全裸にして、病院の廊下で嬲っていた。女は切れ長の二重瞼に、鼻筋が通った美しい容貌を持っていた。乳房や腰の張りも申し分無かった。女はこの病院の看護師をしていた。

佐久間恵理、まだ二十歳になったばかりであった。男達の方は、年配の男が、大杉竜吉といい広域暴力団の幹部であり、糖尿病を患い、この病院に入院していた。若い方は、成田正義といい、大杉の子分であった。男達は

以前から、担当看護師の恵理を狙っていた。

退避勧告が出され、病院関係者が避難している最中に恵理を呼びつけ、病室に閉じ込めたのであった。彼ら以外、誰もいない病棟で、一日以上、陵辱は続けられた。

二人の男達は交代で恵理を責め抜いた。何度犯されたか、記憶に残らぬほどだった。アヌスや膣に異物感が残っていた。精液塗れになると、病棟の浴室で全身を洗われた。その後は限りの無い陵辱が待っていた。今、恵理は、冷たい廊下の上に四つん這いにされ、大杉にアヌスを舐められていた。膣には大杉の凶太い指が入れられ、中をかき回されていた。豊かな乳房を空いている方の手でこねくり回された。大杉の女体を知り尽くした巧みな愛撫により、恵理は再び、何度目かの快感を覚え始めて

いた。大杉には、無理矢理、性交奴隷になることを誓わ
されていた。

「いい……。逝く……」

深い尻の割れ目を大杉の顔に擦りつけた。大杉の熱い
舌先がアヌスに進入してきた。

「ああ……。いい……」

背筋を仰け反らせて果てた。すぐに仰向けに寝かされ、
太股を押し広げられて、真珠を入れた男根を膣に入れら
れた。大杉のざらついた舌が、口の中に侵入してきた。
舌を吸い出され、音を立ててしゃぶられた。思わず、大
杉の腰を太股で締め上げ、背中に爪を立てていた。その
時、一瞬、広間のように明るくなった。

「ギャー！」

病室の窓から外の様子を伺っていた成田が、絶叫をあげた。ふらふらとした足取りで廊下に歩いてきた。何も言わずその場に倒れ伏した。全身から炎が噴出していた。衣服は燃え落ち、皮膚は焼け爛れ、頭部の皮膚が毛髪ごとずり落ちていた。

「何だ！コリヤ！」

大杉は絶叫し、病室に踊り込んだ。

窓の外は、見渡す限り、火の海となっていた。火柱があちらこちらで上がり、黒煙が舞い上がっていた。

遠くから、高さ数十メートルはある巨大な津波が、押し寄せていた。高層ビルを一瞬で倒壊させ飲み込んでいった。大杉は動くことができなかった。ただ、大口を開けてその様子に魅入っていた。

廊下に倒れていた恵理は、一瞬で核ミサイルが落ちたことを悟った。何とか立ち上がり、近くの壁に取り付けられたダストシュートの扉を開けた。その先は地下のゴミ処理施設に繋がっていた。股間から大杉の精液が零れ落ちた。躊躇している暇は無かった。形の良い片足をあげ、下半身からダストシュートの暗い口に飛び込んだ。一瞬の後、病院は倒壊し津波に飲み込まれた。

「大統領！ただ今、我が軍事衛星が、中国海軍の戦略型潜水艦三隻を日本海で確認しました。時速三十ノットで我領海内を侵攻中です」

「迎撃体制はどうなっている？」

「対戦哨戒機百機と、潜水艦十六隻が、現場に急行中で

す。十分以内に交戦を開始する予定です」

「猛撃を加えよ。何としても、戦略ミサイル発射を阻止するんだ！」

時刻は深夜を過ぎていた。中国が、中距離核ミサイル攻撃の後に、戦略型原子力潜水艦を使用することは予想されていた。予め、迎撃体制を整えていた。スタッフの予想通り、十分後、海中での戦闘が開始された。海上自衛隊の潜水艦隊が一斉に魚雷を発射した。中国海軍の原潜三隻の内二隻が、海上自衛隊のステルス潜水艦の発見が遅れ、撃破され海の藻屑と消えた。

暗闇の中、百機の対戦哨戒機が、残る一隻に襲い掛かった。上空から機雷や魚雷を雨のように降らせた。中国

原潜は、機雷が到達不可能な深度まで潜航していった。

その深さで、核ミサイルを発射することは技術的に不可能であった。切れ目の無い攻撃を加えることで、中国原潜に核ミサイル発射の機会を与えなかった。中国原潜の速度は、三十ノットを超えていた。海上自衛隊の潜水艦の最高速度は二十ノットであり、追い続けることはできなかった。

「まだ、撃沈できないのか！」

木村が、スタッフに向かって、叫ぶように言った。

「大統領。お言葉ですが、敵原潜は我潜水艦隊より遙かに高速で移動することができます」

「原潜には原潜で対処する以外無いということか……」

「対戦哨戒機の攻撃は後どのくらい続けられる？」

「最大で二十分というところです」

司令部に重い空気が満ちていた。敵原潜は、一隻で二十発の戦略核弾頭ミサイルを搭載していた。それだけで、日本全土を壊滅させることが可能だった。

「……旗艦ソウリュウに、X₁を使用するように伝えよ。ソウリュウ以外の全哨戒機と潜水艦に、至急退避するよう伝えるんだ」

木村は搾り出すように言った。額に汗が光っていた。司令室内にさらなる緊張が走った。防衛研究所では、ウイルス事件以来、極秘裏に核兵器の開発を行っていた。X₁とは核魚雷の仮称であった。

「片桐艦長。司令部から命令が入りました。X₁を使用

せよとのことですよ」

ソウリュウの副艦長、佐久間二等海佐が、司令所の大
型スクリーンを凝視していた艦長に報告した。

「全乗組員に退避命令を出すんだ！脱出用ボットを使え。
後は私がやる」

髪をオールバックにまとめ、初老を迎えた艦長の片桐
洋一が振り返った。

「お言葉ですが、艦長。お一人では……」

「心配は無用だ。この艦は完全自動での航行が可能だ。
プログラミングどおりに敵艦を撃沈するだろう。私は万
が一のために残らねばならない」

「私もお供させて下さい」

「駄目だ。……日本は私が守る。お前は、生きて、……」

私の娘と孫を守ってくれ。これは、艦長としてではなく、
義父としてのお願いだ」

片桐は穏やかな口調で、そう言った。

「ですが、艦長！……いや、お義父さん……」

「時間が無い。もう、行きなさい」

片桐は、佐久間に背を向けた。佐久間は、何か言おう
としたが必死に押し殺した。片桐の背中に向けて、深々
と敬礼し司令所を後にした。ひとり残された片桐は、制
服の胸ポケットから二枚の写真を取り出した。一枚には、
佐久間二等海佐と、その妻であり、片桐にとっては愛娘
である美佐と、三歳になったばかりの孫娘の彩が写って
いた。皆、心に染み渡るような笑顔を見せていた。もう
一枚には、昨年他界した愛妻の京子が、微笑んでいた。

少しの間、二枚をじっと見詰め、ゆっくりとした動作で再び胸ポケットに仕舞い込んだ。そして、再びスクリーンに視線を向けた。

「お前を生かしておくわけにはいかないんだ」

目に見えぬ敵艦に向けて、独り言を呟いた。その時、スクリーン上に敵艦を示す輝点が、現れた。深海から急浮上してきたのだ。核ミサイル発射の意図は明確だった。片桐の握り拳が震えていた。数秒後、艦内に魚雷の発射音が鳴り響いた。

約三十秒後、北九州市沿岸三百キロの日本海上に、真昼のような閃光が煌き、キノコ雲が立ちあがった。熱線と衝撃波に泡立つ海面から、一発の弾道ミサイルが東京方面に向けて発射された。数十メートルにも及ぶ津波が、

四方に向けて伝播した。

「大統領！一発のSLBMが、東京方面に向けて発射されました。イージス艦及び地上部隊からペトリオットが発射されました」

「何！迎撃は可能なのか」

「時間がありません！敵ミサイルの速度に追いつけません！」

スタッフが、悲痛な声を上げた。

「東京が火の海となったら、日本は破滅だ。仕方がない。

「Z」を発射せよ！」

大統領が、立ち上がり叫ぶように言った。

「東京上空で、成層圏といっても核ミサイルが爆発した場合の被害は予想できません」

「かまわん！全責任は私が負う」

じっと、スクリーンを睨み付けた。数秒後、核魚雷と同様に極秘に開発を行っていた核迎撃ミサイル、Zが、東京湾に待機していたイージス艦から発射された。

核爆発の衝撃によつて、敵ミサイルを破壊する究極の迎撃システムであった。数秒後、東京上空百キロの高層域に、閃光が煌き、辺りは真昼のように明るくなった。

巨大な火の玉が出現し、敵ミサイルを飲み込んだ。関東地区一帯は、電磁波の影響により、完璧なシールドを施された光通信網以外、すべて不通となった。強力な電磁場のため消灯していた街路灯がすべて、明滅を繰り返した。都内の変電施設や路上に駐車していた車両が、一斉に火を噴き出した。あちこちに火の手が上がり、夜空を

メラメラと焼き焦がした。

北京市街に四万の陸上自衛隊員が、進軍を開始した。

数百万の人民解放軍は死に絶え、反撃してくるものは無かった。陸上自衛隊の精鋭部隊が、共産党本部を襲撃したが、蛻の殻であり党幹部は既に逃走していた。市内は、数百万人の難民で騒然としていた。あちらこちらで、火災が発生し、噴煙が街を覆っていた。治安も最悪な状態で、強盗・強姦・殺人等の犯罪が急増していた。

彼らの後を追うように、第三特殊部隊が、大型輸送機で北京空港に到着した。市内を多目的戦闘車で巡回し、若く美しい女を発見次第、捕獲して大型輸送機に積み込んだ。

防衛研究所の幹部であり、一佐の階級を持つ加納沙織は、北京郊外にある無人となった民間人の家屋を不法占拠し、捕らえた二人の女性兵士を陵辱していた。全裸に剥き、後ろ手に縛り付けた二人を、寢室のダブルベッドにうつ伏せにして、両手でファイトバックを行っていた。沙織の手が出し入れされる度に、二人の膺から尿が交じった愛液が迸った。二人とも何度もいかされておろし、意識が朦朧としていた。部屋には彼女達の喘ぎ声が響いていた。

沙織は、バイセクシャルであり、美しい女には目が無かった。目の前に並んでいる二つの尻は、色艶ともに極上で、脳が爛れるような快感を覚えていた。さんざん、弄んだ後、口封じのために、二人を始末しようと考えて

いた。上級士官が捕虜を陵辱して、ただで済む筈は無かった。ただ、殺すつもりはなかった。沙織は以前から、美しい女を陵辱の末に殺害し、その肉を食べてみたいと考えていた。

この家の厨房は、広く調理器具は何でも揃っていた。年上の娘を串刺しにして全身ローストし、年下の娘は、生きたまま尻を捌き、刺身にしようかと考えていた。両手を動かしながら隠微な思いに耽っていた。

たまらなくなつて、目の前の美尻に噛み付いた。血が滲むくらい強く噛んだ。娘は絶叫し、尻を打ち振るった。

沙織には淫らな動きに感じた。沙織は、腰に装着したペニスバンドの男根で、娘の膣を貫いた。もう一人の娘の膣を手で犯しながら、美尻を動かした。沙織が、仰向

けに寝かせた娘に股間を舐めさせていた時、寝室のドアが乱暴に開け放たれた。屈強な体付きをして、自動小銃を手にした男達が、侵入してきた。震え慄く沙織を後ろ手に縛り上げた。

「黄。来てくれたのね」

「あたりまえよ。皆、一緒だ」

沙織に犯されていた娘達と知り合いのようであった。

二人の娘達は、男たちによって縛めを解かれ自由になった。

「どこに隠れていたのよ？」

「俺達はもともと特殊部隊だ。ゲリラをやって、自衛隊を痛めつけてやっているんだ」

麗がベッドから立ち上がり、男に、羽交い絞めにされ

ている沙織の前に立った。

「随分と。可愛がってくれたわね」

年上の麗が、沙織の重たげな乳房を驚掴みにして締め上げた。

「うっ……」

沙織の白い肩先が、震えていた。

「うつ伏せに寝かせて！」

楊が叫ぶように言った。沙織の盛り上がった白い尻に齧り付き、血が滲むくらいに強く噛んだ。

「ギャー！」

沙織の絶叫が響いた。

「楊。今はそのくらいにしておけ。俺達が楽しんだ後で好きにしているから」

側で見えていた男達が一斉にズボンを脱いだ。黒く猛々しい男根が何本も天を突いていた。沙織の視線が男達の男根を追った。すぐに押し倒され、前後から貫かれた。

身体を引き裂かれる激痛に、のた打ち回った。口もこじ開けられ、異臭のする男根を挿入された。豊かな乳房にも舌や指先が這いまわっていた。次から次へと男達がかわって、男根で貫かれた。アヌスと膣に入っていた男根が弾けた。全身に慄きのような快感が走り抜けた。もうどうでもよくなっていた。沙織は己が人生の結末を悟っていた。目の前の男根に喰らいついた。

数時間後、沙織は、その家の厨房に運び込まれた。その前に浴室で、楊と麗によって大量の浣腸を施され、腸

内を洗淨されていた。楊と麗を調理しようと思っていた厨房の調理台に寝かされた。男達によって四肢を抑えつけられた。

「中国には、二十世紀の初めまで、リョウチの刑というのがあってね。罪人は生きたまま、息絶えるまでその肉を切り刻まれるんだよ」

麗が沙織の黒髪を撫で上げるように言った。空いた方の手には、肉切り包丁が握られていた。沙織の視線が、包丁の鋭い切っ先に吸い寄せられていた。豊かな胸が大きく上下していた。

「どこから食べて欲しい？やっぱリオマンコがいいわね。黄、切り取っちゃって！」

近くに立ち、調理服を着た黄に肉切り包丁を手渡した。

黄は沙織の下腹部を片手で押え、肉切り包丁を膾口に差し込んだ。

「ギャー！」

絶叫とともに鮮血が噴出した。麗は手馴れた手付きで、悶え苦しむ沙織の膾肉を切り取り、細かく刻んで塩胡椒をかけフライパンでさっと焼いた。肉を焼く香ばしい匂いが部屋に満ちた。

「日本の女は栄養がいきとどいていて美味だね。今度は尻肉だよ。女を裏返しにして」

皆の前に、沁み一つ無くスベスベの尻が露になった。

ごくりと喉を鳴らす音が聞こえた。

「たっぷりとお肉が詰まっているようだね」

麗が包丁の峰で、盛り上がった白い尻を撫でた。太腿

の付け根に包丁を押し当て、一気に尻肉を削ぎ落とした。
沙織は、激しく全身を震わせ、失神した。楊が麗から、
尻肉の塊を受け取り、俎板に載せて、細かく刻んだ。皿
にきれいに盛り付けた。皆の手が一斉に伸びて、一口大
に刻んだ尻肉を奪いあった。

皆、無言で口を動かした。あちこちで、溜息が漏れた。
久しぶりの新鮮な肉の味に満足していた。

「麗姉さん。肝臓が食べたいな」

楊が口の周りについた血を舐めながら言った。

「いいよ。たっぷりとお食べ」

麗は、沙織の腹を縦に裂いて、湯気をあげる肝臓を取
り出し、楊に手渡した。楊は、肝臓に喰らいつき、貪り
始めた。その横で沙織は、眠るように息絶えた。

陸上自衛隊によって制圧された北京市郊外にあるスタジアムには、大勢の中国軍捕虜が集められていた。

「桜井一等陸尉。司令部から指令が入りました。女性兵士以外すべて処刑せよとのことですよ」

戦闘ロボットから無機質な機械音が発せられた。

「何だと！捕虜の扱いについては国際条約で定められている筈だ」

桜井一等陸尉が、正面に立っている戦闘ロボットを見上げた。

「大統領命令です」

その時、百台の戦闘ロボットが、グラウンド内に佇む

捕虜達に向けて、一斉に五・五六ミリ チェーンガンを構えた。

「止めろ！これは……」

凄まじい銃撃音がして、ロボット達を制しようとして前に出た桜井一等陸尉の全身がずたずたに引き裂かれた。

銃撃音はなおも続き、捕虜達を銃殺していった。血飛沫があがり、断末魔の絶叫が響いていた。

一瞬後、スタジアムは元の静寂に戻った。グラウンドには無数の死体が転がり、百名あまりの女性兵士のみが、呆然とした表情で佇んでいた。

「田中一等陸曹。桜井一等陸尉が、殉職されたので貴方が隊長となりました。ご指示下さい」

「……わかった。待機していてくれ」

血の気のない顔をした田中一等陸曹は、やっとそれだけを言うことができた。

その時、グラウンド内に第三特殊部隊が、整然と侵入してきた。呆然と佇む女性兵士を全裸に剥いて、後ろ手に手錠で拘束して、屋外へと連行していった。

屋外では特殊部隊のトラックが待機していた。連行された女性兵士達は、尻に麻酔薬を注射され、木箱に詰められ、荷物のようにトラックの荷台に積み上げられていった。

民家の一軒から、女の悲痛な叫び声が響き渡った。付近を巡回中の大田陸曹が、その家のドアを開けた。中から、濃密な血匂が噴きだした。奥へと急いだ。一階の居

間では、第三特殊部隊の隊員達数名が、二十歳くらいの美しい中国娘を全裸に剥いているところであった。

床に娘の弟と思われる十歳くらいの少年が倒れていた。手にはナイフが握られていた。眉間を撃ち抜かれ、既に息絶えていた。床に大量の血溜まりができていた。少年は姉を守るために戦おうとして、無残に撃ち殺されたものと思われた。

大田の脳裏に五年前の悪夢が蘇った。長期訓練を終了し、数ヶ月ぶりに帰宅したときのことであった。ブザーを押しても何の反応が無かった。鍵はかけられていなかった。胸騒ぎがして奥へと急いだ。居間のドアを開けた途端、真っ白いものが視界に飛び込んできた。床に全裸姿の妻が倒れていた。首には絞められた痕があり、白目

を剥いて、既に事切れていた。豊かな乳房や太腿や尻には、無残な噛み傷が残されていた。

近くに十歳になる一人息子が倒れていた。頭部を鈍器で強打された痕が残っていて、手には包丁が握り締められていた。妻は強盗に犯された後、絞め殺されたのであった。検死結果では、膣やアヌスから大量の精液が検出された。胃内にも残っていた。

自分を救おうとした一人息子を叩き殺され、その犯人達の男根を啜えさせられ、前後から犯される妻の心境を思うと、涙が止まらなかった。

「何をしているんだ！」

大田陸曹が、叫んだ。特殊部隊の男達は、娘を全裸に剥いて、膣やアヌスを指で弄っていた。

「何だ。お前こそ。陸曹の分際で！」

「女を犯すことが、お前たちの任務なのか！」

大田が、男達の唾液に濡れた女の臍や乳房を見ながら叫んだ。男達のひとりが動いた。腰のホルスターに収められていたオートマチックを抜き放った。大田はそれを見逃さなかった。自動小銃を男達に向け、引き金を絞つた。軽快な連射音が室内に響き、血飛沫があがった。男達も重症を負いながら反撃した。

一分後、室内には大田と、特殊部隊の男達三人が床に倒れ、絶命していた。

中央には、全裸に剥かれた中国娘が、呆然とした表情で立ち竦んでいた。

